
ゼロの使い魔は不定形

ラーメン半ライス付き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔は不定形

【Nコード】

N0511U

【作者名】

ラーメン半ライス付き

【あらすじ】

使い魔召喚の魔法『サモン・サーヴァント』でルイズが召喚したのは、自分の体重程もある玉虫色に光る「何か」が入った箱だった・・。

「ゼロの使い魔」と「うちのメイドは不定形」のクロス小説。

第1話

「あなたが、私たちのご主人様……ですか？」

トリステイン魔法学院の火の塔寄りにあるコルベールの研究室。緑や茶色の何に使われるかも分からないような液体が入った薄汚れたフラスコや、こぼれんばかりの謎の白い液体で満たされたビーカー、薬液を温めるためのアルコールランプなどが無作為に置かれた一室。一目見ただけでまとも掃除もされていないとわかるその部屋のかまどに置かれた、汚い室内には不釣り合いなほどきれいな大釜の中から澄んだ横笛のようなその声は聞こえた。

疑問形で大釜の中から自分に問いかけてくるメイド服の少女の姿を見て、これは一体なんの冗談なのだろうかと私、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは思った。

もし問いかけられた場所がこのボロ小屋でなく、そしてそれが学院のメイドからの問いかけならば、「何当たり前のこと聞いてんのよ」と即答している所なのだが。

エメラルドグリーンの瞳に、それと同じ色の腰まで届くほど長い髪の毛、そして学院のメイドとは異なるデザインのメイド服を着た少女。そこまではまあいい。

彼女が少し動かたびに、自分の薄い胸と比べてあまりに大きすぎると言える豊満なバストがぶるんぶるんと動いていることもこの際無視してもいいだろう。ちょっと許せないけど。

それよりもただ一点、そんなが彼女が先程まで人肌程度に温められたお湯と、私がつい先程『召喚』した玉虫色の「なにか」で満たされていたはずの大釜の中から出てきたという事実が私を困惑させ、

恐怖させている。

こんな生き物は見たことも話に聞いたこともない。

教師でありこの小屋の主でもあるコルベール先生を助けを請うような目で見つめる。しかし、私より多くのものを見てきているであろうこの年輩の先生ですら、信じられない物でも見たかのように動かないでいるのを見て、私はより一層困惑と恐怖の色を強める事となった。

どうしてこうなった……。

私は目の前の現実から逃げるように30分ほど前に行われた『サモン・サーヴァント』の儀式的ことを思い出していた。

……

「……箱？」

そう、私が爆発という名の失敗を重ねた末について、初めて成功させた魔法、『サモン・サーヴァント』。それによって呼び出した物は、ヒモで縛られた大きめの箱だった。

正直訳がわからない。コルベール先生が「どうやら成功のようだね」と言ったが皮肉か何かだろうか。

神聖で美しく強力な使い魔にはとてもじゃないが見えない。ガーゴイルのような無生物を使い魔にしたという話は聞いたことがあったがこれはそもそも生物とか無生物だとかそういう枠の問題ではない。周りから私を野次る声が聴こえるが、それに反応することすら出来ないほどに私の頭は混乱の真っ只中にあった。

そもそも箱を使い魔にするなど前代未聞の行いな訳で、そんな事するならいつそ亜人でも平民でも貴族でもなんでもいいから呼び出して『コントラクト・サーヴァント』してFirst kissから始まるふたりの恋のHistoryしたほうがまだ――

「あー、ミス・ヴァリエール。とりあえずその箱を開けてみてはどうかね」

目の前の現実を受け入れられずにめっちゃめっちゃなことを考え出したところで先生の声を聞いてはっと気付く。

なぜか召喚されたものが箱だったとはいえ、箱には中身というものがあるわけで。

その中にはきつと、いや必ず、ヴァリエール公爵家の三女こと私ルイズ・フランソワーズにふさわしい使い魔たる生き物が居るんだろう。居るに違いない、多分。

というかなぜ箱を開けるという発想に気づかなかったんだ、私。

そう考えると、目の前の箱が急に始祖の秘宝の眠った宝箱のように、とてつもなく価値のある魅力的なもののように思えてきた。

早速、箱を開けようとヒモを解こうとする。が、固く結ばれたヒモは一筋縄では解けず、引っ張ってちぎろうとしても見たことの無い材質で出来たそれは私の力ではびくとしなかった。

結局そんな私を見かねた先生から渡されたナイフを使ってヒモを切り、箱を包んでいたこれまた初めて見る柔らかいフワフワした材質の布のような物を剥ぎとって箱を開けた。

箱の中にはひんやりとした冷気を発する大きな石のような物。そしてその上に置かれた、またまた見たこともない材質で出来ている、透明な袋に詰められた異国の文字で書かれた手紙があった。

他には何かないだろうか、手紙と石を箱から取り出してみる。

すると箱の底に直径八十センチ、厚みは二十センチほどの、カチコチに冷えて固まった玉虫色に光り輝く球体の「何か」があるのを見つけた。

箱には他に目ぼしいものも見当たらないため、どうやら、私の使い魔はこの「何か」であるらしいことが分かった。

正体が全く分からないがために、この「何か」が使い魔であることを喜ぶべきなのか。それとも嘆くべきなのかの判断すらつかなかったが、何にせよ『サモン・サーヴァント』は成功したという事実には私は安堵した。

「ふむ、初めて見る文字ですね。少しお借りしますよ」

そんな私を尻目に横から見守っていた……というよりハルケギニアでは見かけない材質の物ばかりで構成された箱に興味深々で目が離せないといった様子だった先生が、好奇心を抑えきれなくなったのか異国の文字の手紙を手に取り、勝手に『リードランゲージ』の呪文を行使する。

私の返事も待たずに勝手に手紙を取られて思わずむっとしたが、読めない文字の意味を知る呪文である『リードランゲージ』、私が唱えてもし万が一失敗したら読もうとした物が爆発四散して永久に読めなくなることに思い当たり先生に感謝した。

それと同時に失敗する前提で考えている自分に嫌気がさした。

「どうやら……荷物の中身を3分ほどお湯の中に入れること、と書いてあるようですね。お湯で解凍しろ、ということでしょうか。ここは一つ、『コントラクト・サーヴァント』の前に試してみましようか」

呪文で手紙を読み終えた先生はなぜか苦々しげな表情で、それでいて少し嬉しそうな声でそう言った。

なんとなく、そのまま『コントラクト・サーヴァント』をしなさいと言われると思っていた私は拍子抜けした。

とはいえ私もこの異国の文字が書かれた手紙に書いてあったことを試してから『コントラクト・サーヴァント』するのも無駄にはならないだろうと思って先生の言に頷いた。

手紙のとおり解凍してみれば少しは正体がわかるかもしれないと考えたからだ。

そうして先生は周りの生徒達に先に教室に戻るように言い、私には先生の研究室へ召喚した箱とその中身をすべて持って来るように言くと、準備がありますのでと言ってそそくさと消えてしまった。

周りの生徒達が口々に私のことを囁し立てながら帰っていくのを横目に、胸のむかつきを抑えながらも、私は言いつけ通り箱を先生の研究室まで持って行くこうとして

「・・・・・・・・重っ！」

持ち上げようとして箱の中に詰められた玉虫色に光る「何か」が異常に重いことに気づいた。

人間ひとり分はあるんじゃないだろうかこれは。少なくとも私と同じかそれ以上には重いに違いない。

先生の研究室までは結構な距離があるというのに、いったいどうしてくれようか。魔法を使って運べればいいのだが、もしも失敗した日にはせっかく召喚した使い魔候補の「何か」がそれはもう酷いことになってしまうだろう。

下手したらもう一度『サモン・サーヴァント』をするはめになるか

もしれない。それはそれで有りかもしれないけれど。

さてどうやって運ぼうかと頭を悩ませている私に赤い燃えるような色をした髪に、褐色肌の少女が話かけてきた。

「あんたの使い魔って、それ？」

声の主はヴァリエール家の天敵、ツエルプストー家のキュルケだった。彼女は呆れ顔で私の『召喚』した「何か」を指さして尋ねた。

「そうよ、まだ『契約』はしてないけど………。それが何？ あんたってば、わざわざ居残ってまで私のこと馬鹿にしに来たわけ？」

「そのつもりだったんだけどねえ………。何か毒気抜かれちゃったわ。」

そう言ってキュルケは『レビテーション』を「何か」に対して使った。玉虫色に光るそれが自身の重さを無視してふわふわと浮かび上がる様は見えていながらも形容しがたく、自分の使い魔になるだろう物だというにおぞましいとすら感じた。

でも今は、そんな事はどうでもいい。重要な事じゃない。

「な、ど、どういっつもりよー！」

キュルケが……。ツエルプストーの家の者が私、ヴァリエールの為に魔法を使ったという事。重要なのはそこだ。未曾有の事態に私の脳内は未だかつて無い混乱を期していた。それこそ箱を召喚したときと同じくらいに。

「どうもこうもしないわよ。あんた一人じゃそれ運べないみたいだし。せいぜい感謝しなさいよ」

「そうじゃないわ！な、な、なんであんたが！」

「次からは自分でやりなさいよ。まあ『サモン・サーヴァント』は一応成功したみたいだし、その調子で『コントラクト・サーヴァント』も、他のコモン・マジックも成功させなさいよね」

なんであんたが私のこと助けるのよ、と言おうとした私を遮るようにキュルケはそう一気にまくし立てた後、この調子だと「ゼロ」の二つ名は返上かしらね、とぼそつとつぶやいてさっさと教室へと戻っていった。

顔がちよつと赤みがかっているように見えたのは気のせいだろうか。もつとも顔の赤さなら今の私のほうが格段に上だろうけど。

何はともあれ、これで運ぶのが楽になったのも事実。『レベティション』はかけられた対象が重ければ重いほど、効果が続く時間は短くなる。魔法の効果が切れる前にさっさと運んでしまうことにした。ほんの少し、ほんのちよびつとだけ、キュルケに感謝して。

魔法によつて重力から解放された「何か」の入った箱を担ぐと火の塔のすぐ近くにある先生の研究室まで急いで運んだ。

研究室の前にたどり着くと水を湛えた大鍋を浮かせて小屋の中に運んでいるコルベール先生と鉢合わせた。

「おお、いいところに持つてきましたな。早速始めましょうか」

丁度その時、キュルケが「何か」にかけた『レベティション』が切れて重量が戻ってしまった。いきなり元の重さに戻った箱を支えきれず、私の手からずり落ちた箱はドスンと鈍い音をたてて地面に落ちた。

慌てて中を確認すると、思い切り地面に叩きつけられたにも関わらず箱が柔らかい材質で出来ていたためクッションになったのか「何か」は無事なようだった。

「何か」が一応無事だったことに安堵した私は箱の端っこを無理やり掴み上げて引きずりながら先生の研究室に箱を運び入れた。

小屋の中に入った所で悪臭と薬品臭さをまぜこぜにしたような、不快感極まる臭気に満たされていることに遅まきながら気づいてすぐ外に出る。

「どうしたのですかな、ミス・ヴァリエール？」

小屋からすぐに出て行った私の行動が何に起因しているのか、まるで分からないかのようにコルベール先生は不思議そうに尋ねた。

私はこの髪の薄い先生が、女生徒からまるで人気がない理由の一端を垣間見たような気がした。

「・・・・・・・・小屋の外では駄目なんでしょうか？」

正直この不快感あふれる匂いの室内には3分どころか10秒も耐えられるとはとてもじゃないが思えなかった。

「何が起こるか分からないからね。どんな事態にも対処出来るように、研究室の中でやった方が良くと思うのだよ」

私の望みは呆気無く一蹴された。

どんな事態にもと言うがそれなら外のほうがいいんじゃないか、というかそもそも室内でやる意味はあるのか、正直に言うと部屋が臭いから外でやりたいんです、というかなんでこんなに目を輝かせているですか、輝かせるのは頭だけにしておさい先生などといった疑問や文句はいくら吐いても尽きないほどにあつたが、もはや私はそ

れを口にする気力すらなくしていた。

そうして私は酷い匂いのする掘っ立て小屋の中へと押し込まれるのだった。

「さてと、先に水を温めてからそれを入れるのがいいと思うのですが」

よろしいか？と手順を目線で確認してくる先生に小さく「そうですね」だけ答えると私はうつむいた。自分の使い魔の事とはいえ、もうどうにでもしてくれというのが私の偽らざる本音だった。

さっさと『コントラクト・サーヴァント』を完了させて、風呂に入ってこの嫌な匂いからはおさらばしたい。それ以外のことはもう考えたくなかった。

「温度は……まあ人肌程度でいいでしょうか。では、『ウル・カーノ』！」

大鍋を大きなかまどの上に置いて、先生が『発火』の呪文を唱えると杖から出た炎が蛇を型どり、水と鍋の周りを勢い良くうねって温めはじめた。

下手したら小屋に燃え移るんじゃないかと心配したが、さすがに「炎蛇」の二つ名を持つ火の魔法の教師だけあって炎の操作は完璧のようだった。

かまどと大鍋の淵をぐるぐると燃えながら周回する炎の蛇を見て、こんな状況じゃなかったら先生への好感度が上がっていただろうに思った。

もともと既にこの研究小屋のせいで好感度はマイナスに突入していたので、今更上がったところで好感度が元に戻るだけなのだ。

普通に火をくべて温めるよりも何倍も早く温められた水が人肌程の温度に達したのを確認すると、先生は杖を一振りして炎の蛇を消した。

そうしてついに温まった水の中へ先生の『レビテーション』で軽くされた玉虫色に光る「何か」がゆっくりと投入された。

「あとは3分後のお楽しみというわけだね」

木の蓋を大鍋にかぶせ、砂時計を反転させて嬉しそうに言う先生。人の気も知らずに楽しげにしている先生に対して私の苛立ちも限界に近づきつつあったその時。

ドゴツ！

鍋の中から響いた鈍い打撃音が先程までの私のそんな感情を霧散させた。

ドゴツ！ ガツ、ガガツ！ ベコツ！

打ち据えるようなおとから何かをひっかくような音へ。そして板がへこんだような鈍い音へと変化していった。そして蓋を持ち上げて「何か」が飛び出そうになっているのを見て、先生は慌てて体重をかけるようにして蓋を抑えつける。

が、それでもなお先生をかるがると持ち上げて蓋を大きく上下させて鍋の中から出てこようとする「何か」。

この時になって私はようやく小屋に入ったことだけでなく、ちよつとした考えから先生の案に賛同したことを後悔した。そうして偉大なる始祖ブリミルよ、どうか我々をお救い下さい、それが無理なら

せめて私だけでも、などとふてぶてしく心のなかで祈り始めた。

どう考えても私が召喚した「何か」はまともじゃない。今更気付いたってしょうがない事だけど。私の始祖への祈りは「何か」が蓋にむかつて荒ぶるのを止めて、鍋からの音が静まりかえるまで続いた。

砂時計はとつくに上から下へと砂をうつし終えていたが、それでも蓋にのしかかるのをやめない先生に私は声をかけた。

「とりあえず……どうしましょうか？」

私から声をかけられて気が緩んだのだろうか、「そうだね」と手を顎に当てて蓋の上から体をどけて思案しはじめる先生。

「……蓋から重しがどければ当然鍋から出ようとしていた「何か」は容易に外に出られることになるわけで。

私と先生が同時に「あ」と一声あげるのと同時に、大釜の封をしていた蓋は勢い良く投げ飛ばされて――

かくして話は冒頭へと戻る。

「あの、失礼ながらお聞きしてもよろしいでしょうか？」

あまりの自体に今までのことを回想していた私と、固まったように動かないコルベール先生を見かねたのか、彼女は私たちに声を掛けてきた。

「な、なんですか？ 答えられることでしたら何でもお答えいたし

ますぞ！」

メイド服の少女のような姿をした「何か」のどこか戸惑ったような声を聞いて、先程まで固まっていた先生は我に返ると慌てて返事をした。

それと同時に杖をしつかりと握りしめ、未知の相手に対して警戒を緩めないでいるのを見て、慌てて私も杖を握った。

「えつとですね、一体全体ここはどこで、あなた方はどなた様なのでしょう？ 私たちは新井沢トオル様のお宅でお仕えすることになつていた筈なのですが………」

「ここはトリステイン王国のトリステイン魔法学院にある私の研究室です。私はジャン・コルベールともうしまして、この学院の教師で火の魔法を教えております」

「何か」に対して平静を保ちながら、それでいてきちんと返答している先生を見て私も同じように返答しようとする。

「わ、わわ、わたしのな、名前はは」

駄目だった。

「あちらに敵意は無いようですから、少し落ち着きなさい」

そう先生に言われて、深呼吸をして心を落ち着かせようと部屋の匂い匂いのする空気をおもいきりすって、むせた。

だがそのせいというべきか、おかげというべきか、ちょっとだけ涙が出そうになったが少し気が楽になった。

「わ、私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。学院の生徒よ」

不安と困惑をまぜこぜにしたような表情を見せる緑髪のメイドの姿の「何か」に向かつて、私は答えた。まだ、「何か」は聞きたいことがあるような顔をしていたが私からも聞きたいことは山ほどあった。

さつきまで球体だったはずがなぜかメイド服になって現れた事、なぜか自分を複数形で呼んでいる事、召喚した私ではなくアライザワ・トオルなるトリステインでは聞きなれない名前をした人物の元で仕えることになっていたという衝撃の事実。

いやいやそれよりも、私は『サモン・サーヴァント』を行った時からずっと気になっていた疑問を口にした。

「あなた……一体『何』なの？ 少なくとも人間じゃない……
……よね？」

私が抱いていた疑問に、先程から困ったような顔をしていた「何か」は表情をコロツと変えて、女の私でさえドキツとしてしまうような魅惑的な微笑みを私に向けた。

「申し遅れました。私たちの名前は、人間さんの発声器官に合わせた発音で> テケリ・リ・テケ・テケ・リ・ル・リ・テケリ・テケ・リ・ラ・ル・ラ・テケリ・テケ・テケリ・リ・ル・ラ・リ・テケリ・リ<と申します。南極からトオル様のお世話をするようにと私たちを送り出されたトオル様のお父様は、私たちのことを>テケリさん<と呼んでくださいましたわ。どうかみなさま方もそのようにお呼びくださいませ」

それから、と続けるように「何か」改め「テケリさん」はにこやかにそう言った。

「お察しの通り、人間では有りませんわ。私たちは以前のご主人様に作られた人工生命体で……>シヨゴスくとも呼ばれておりました」

・
・
・

これが私と「何か」……もとい彼女たち。テケリとの最初の出逢いだった。

第2話

お互いに会話を重ねていくうちに彼女、テケリが温厚な性格をしていること、危害を加えるつもりはこれっぽっちもないらしいということが分かった。

テケリの話をまとめると、彼女は「チキュウ」というハルケギニアとは全く別の世界で「以前の主人」に奉仕種族として創られた生物、「シヨゴス」という種族だとか。ちなみに一人称が「私たち」なのは、テケリが複数の同族と融合しているからだとか。よくわからないがそういうことらしい。

テケリとその仲間は「以前の主人」にあまりに過酷な労働を、長い年月の間強いられ続けて、ある時「以前の主人」へと反乱を起こした。

が、あえなく反乱は鎮圧され、地中深くに封印されてしまうはめになった。それから数えきれないほどの月日が過ぎ、あるとき地中からテケリを手紙の主が発掘。

テケリが人間の社会でも生きて行けるようにと、文化から礼儀作法にいたるまで色々と教育を施した。そして知識だけでなく広い世界を見せるために、テケリを「コクサイビン」で離れた地にいる息子、「トオル」の元へと送ったらしい。

しかし目的地に辿り着く前に、私の『サモン・サーヴァント』によってハルケギニアに呼び出されてしまった。

一言でまとめて言うと、私は『召喚』で人の使い魔を横取りした、ということになるらしい。

正直言つて、彼女の言ったことは異世界云々も含めてとてもじゃないけど信じられないようなことばかりだった。

でも、彼女が元々は球体で、箱から取り出してお湯に三分浸けてみ

たら人になっちゃいましたー、だなんてことを自分の目で見た以上はどうにも受け入れざるをえない。現実是非情である。

「つまり使い魔を『召喚』する魔法でルイズ様に呼ばれたのが私たちだった、ということなんですね」

コルベール先生の研究室の外、火の塔の蔭に立てられたその場所で、自分の置かれた状況を理解したテケリが確認するように聞いて来た。長いこと話あっていったものだから、既に太陽は地に沈みかけており、二色の月が空へと登ろうとしていた。

「そうよ。でもまさか使い魔を呼ぶ呪文で人の使い魔を呼ぶなんて・・・これは一体何の冗談なのかしらね」

「その、ご期待にそえず申し訳ございません」

「別に謝らなくていいわよ。呼び出しちゃったのは私なんだから」

むしろ本来謝るべきなのは『召喚』して彼女に迷惑をかけた私だろくに、テケリはそう言っただけに本当に申し訳なさそうな表情でぺこりと頭を下げて謝った。

それにしても・・・いわゆるスライムの親戚みたいな生き物でありながら、人並の知識と思考力を持っていて、その上どこからどう見ても人間にしか見えない姿に変身することも可能。

メイドの姿になっていただけのことはあり、礼儀作法についても意外としっかりしてる。

使い魔としてはかなりランクが高い部類に入るんじゃないかしら？もし人のじゃなかったなら喜んで『契約』しているとところだったのに、残念。

「申し訳無いのですがお話しした通り、私たちが既にお仕えするご主人様は既に決まっております。そういう訳ですので、どうか私たちを元の世界に戻していただきたいのですが・・・」

「『召喚』してあなたに迷惑をかけたことについては悪いとは思ってるわ。本当よ？でもね、あなたを元の世界に帰すのは、その・・・無理なの」

続けてまたぺこりと頭を下げてお願いするテケリに対して、私は沈んだ声でそう返した。

勝手に人の物を横取りしたような形になったとはいえ、こればかりはどうしようも無い。

「無理とおっしゃいますと？」

はてさて、どう答えればいいものか。どう説明してもテケリの悲しむ顔を見るはめになる気がするのだけれど。

不安げな顔で私を見つめるテケリにどう返答したものかと答えあぐねているのを察してか、今度はコルベール先生が彼女の問いに答えた。

「『サモン・サーヴァント』はメイジの一生のパートナーとなる生き物を召喚する神聖な儀式なのです。それ故に、呼び出した相手を帰すなどといった行為は今の今まで想定されていなかったのですよ」

「つまり、私たちが元いた場所に戻る方法は無いということでしょうか？」

「私の知る限りでは・・・ですが帰る方法が無いと決まったわけでは有りません。そこで提案なのですが」

そこまで言ってから、先生はなぜか私の方へと視線を移した。

「あなたが元の世界に戻れるよう私共は出来る限り手を尽くします。その代わりに、戻る方法が見つかるまでの間はミス・ヴァリエールの使い魔となつてはいただけられないでしょうか？」

「私たちの世界で言うところの使い魔というのは、ご主人様の身の回りのお世話をしたり、危険からお守りすることがお仕事だったのですけれど、それはこちらでも同じなのでしょうか？」

「おおむね同じといったところでしょう。主であるメイジのパートナーとなり、時には目となり耳となり、手足となつて働くのが仕事です。」

「そういうことでしたら、私たちの方からもぜひお願いいたします」

先生の思いがけない提案と、それに加えて意外にもあつさりとその提案を飲むテケリに思わず戸惑つてしまった。

私としては喜ばしいことなんだけど、もう少し考えて返事したほうがいいんじゃないの？

「あなた、本当に私と『契約』して、使い魔になつてくれるの？」

「ええ、構いませんわ。私たちはこちらの言葉を喋れこそしても、こちらの文字は読めないみたいですし、頼れるつても無いですから満足に調べものもできませんし。それに……」

「それに？」

「それに、ご奉仕することこそが、私たちの本分ですもの」

誰かのために働くことこそが私たちの生きがいですから。そう言っ
てテケリはまぶしい笑顔を浮かべた。よく出来たメイドである。

嫌々使い魔やりますと言っているわけでもなく、むしろ使い魔にな
ることを喜んですらいるように見えるテケリを見てそれ以上言
葉を続けるのをやめた。

そもそも私はテケリに使い魔になってももらえないと留年が確定する
身なわけで。条件付きで一時的にはいえ、使い魔になることをテ
ケリが自分から望んでくれるなら、もう何も言うことはない。

「決まりですな。ではミス・ヴァリエール、『コントラクト・サー
ヴァント』を始めてください」

「そういえば、『コントラクト・サーヴァント』というのはどうい
った魔術なんですか？」

「すぐにわかるから、ちょっとおとなしくしてなさい」

頭の上にクエスチョンマークを浮かべ、疑問をぶつけるテケリにそ
う言って、彼女の白い両頬を、私の両手で抑えた。

ぶにゅっ、と、いやに柔らかい感触が私の手のひらから伝わってく
る。

人の肌ってこんなに柔らかかったっけ？ そう思ってから、ああそう
いえば、この子人間じゃないんだっけといまさらながら思い出して、
自分がテケリを人間と全く同じに見ていたことに気づいた。

私にいきなり頬を抑えられて不思議そうな顔を浮かべるテケリ。つ
いさっきまで玉虫色の球体だったなんて、自分の目で見た私でも信
じられないくらいに、テケリは人間らしく見えた。

そんな彼女に向かって私は『コントラクト・サーヴァント』の呪文

をつむいだ。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

相手は女の子・・・というかそれ以前に人じゃないんだしこれはきつとノーカンよね。そう思いながら私はテケリさんの唇へと『契約』のキスをした。ファーストキスだった。

突然の私の行動に驚いた様子の彼女だったが、すぐにその行為が『契約』なのだと理解したのか私が唇を離すまでじっとしていた。

魔法が失敗してテケリさんが爆発する、なんてことは起こらずとりあえず安心していると彼女の右手の甲が輝きはじめた。

眩い光が彼女の右手の甲へとルーンを刻みこんでいく。

そうしてルーンを刻んでいった光は時間と共に少しずつ小さくなっていき、光が消える頃には彼女の右手に『契約』の印がしっかりと刻み込まれて儀式が終了したことを私たちに知らせた。

いろいろとあったが結構な能力を持った使い魔と契約できたし、これでなんとか私も進級することが出来る。そう思うと喜びを抑えきれず、思わず顔がにやけてきた。

「ふつつか者ですが、今後ともよろしくお願いいたします。ご主人様」

そういつて頬を朱色に染めて、恥ずかしそうに手をモジモジとする。そんな姿を見て、ついさきほど『契約』のためとはいえ彼女の唇にキスしたことを思い出して私も顔を赤らめた。

そういえば自分のことしか考えてなかったけど、あれって彼女にとっても初めてのキスだったりするんだろうか。考え出すと意識してしまつて、彼女から視線をそらせなくなつた。

「どうやら『コントラクト・サーヴァント』はきちんとできたようだね。しかし・・・これは珍しいルーンだ、ちよっとスケッチを取らせてもらおうよ」

お互いに顔を赤くして見つめ合う私たちをよそに、先生は浮かび出たルーンを興味深そうな顔をして凝視して、それから羊皮紙と羽ペンを研究室から取ってきた。

そうして右手に刻まれたルーンを、羊皮紙へスケッチするため、ペンを走らせる。

そういえば、先生の提案のおかげで『契約』することになったのだから、先生には感謝したほうがいいのかもしれない。

その提案を快く受け入れてくれたテケリにも。なんだか恥ずかしいから、口に出しては言えないけど。

「そうそう、帰還の方法を探すのに、フェニアのライブラリーを利用できた方がいいでしょうね。あそこにはなかなか珍しい本が多いですから」

ルーンを写し終えて、どこか満足気な顔を浮かべた先生だったがふと思い出したかのようにそう言った。

フェニアのライブラリーは教員のみが閲覧を許されている図書室の一区画だ。

稀覯本がかなりの数を占めているらしいので、許可さえあればぜひ読みたいと思っていたところだ。

「閲覧の許可が貰えるか分かりませんが、一応学院長には話を通しておきましょう。とりあえず今日のところはもう遅いですし、部屋戻ってゆっくり休みなさい」

先生から話を通してくれるなら、ひよつとしたら許可を貰えるかもしれない。この提案は素直にありがたいと思った。

それに気づけば時刻は夜、今頃私以外の生徒は自分の部屋で『召喚』した使い魔と、スキンシップを図っていることだろう。

先生の言葉に頷くと私は、テケリと自分の部屋へ戻ることにした。

・
・
・
・
・

「凄いです！本物の貴族のお嬢様みたいな部屋ですね！」

「あんだね、私は実際に貴族でお嬢様なんだけど……まあいいわ。今日からここで一緒に暮らしてもらうけど、いいわよね」

「こんな素敵な部屋に泊めてくださるんですか？」

「いいも何も、あんたは使い魔で私はご主人様なんだから。一緒に居るのは当然なの！」

高価な調度品で飾られた内装を、感動したような目で見つめているテケリにちよつと呆れつつもそう答えた。

部屋の窓からは召喚の儀式が行われた草原が、月のあかりに照らされて輝いて見える。空を見上げてみると、宙に浮かぶ赤と青の、大きな月が見えた。

「なかなか、いい眺めでしょ？」

「そうですね。とっても綺麗だとは思ってます。でも……」

「でも、何よ？」

「なんだか、本当に別の世界に来てしまったんだって、そんな気持ちにさせられます」

双子の月を部屋の窓から見上げ、悲しそうな、それでいて少し淋しげな。そんな表情を浮かべて言った。

彼女の世界では月はただ一つ、黄色いそれが浮かんでいるだけだったらしいので、きつとそれを思い出して元の世界への思いをつのらせているんだろう。

私にまるで責めるような言葉も、怒る素振りも見せなかったテケリ。でも実際は彼女の主人となるはずだった「トオル」のことを、あの箱の中で運ばれている間心待ちにしていたのかもしれない。

そんな彼女の思いを、私は『召喚』で引き裂いてしまったんだ。そう思ったら『契約』に成功したときの浮かれた気持ちは霧散して、ただ私の胸には彼女への罪悪感が込み上げてきた。

「あの、ご主人様、どうかなさったんですか？」

急に落ち込みはじめた私の気持ちに気づいたのか、心配そうに彼女はそう言った。文句一つ言わずに私をご主人様と呼んで気遣ってくれるテケリ。

そんな彼女を見て、私の中に一つの決意が固まっていく。

「絶対にあなたを元の世界に帰す方法を見つけてあげるんだから」

必ずあなたを「本当のご主人様」の所に送ってあげるんだから。そう言って私は彼女の柔らかい体におもいきり抱きついた。

私の突然の行動に思わず困惑した様子のテケリだったが、やがて嬉しそうにぎゅっと抱きついた私の髪を、静かに、優しく撫でるのだ

つ
た。

第3話

トリステイン魔法学院の本塔にある図書館。

始祖が降臨して以降の数千年もの間に出た本、いわばハルケギニアの歴史がこの図書館には詰め込まれている。

三十メートルほどの高さのある本棚にぎっちりと本が詰められてそれが幾つも並んでいる様はまさに圧巻の一言に尽きた。

そんな無数に本が蔵書されている海の中、その中でも教師のみが閲覧を許されている図書館の一区画『フェニアのライブラリー』。

稀覯本ばかりが蔵書されているその場所にジャン・コルベールの姿はあった。

ルイズと、その使い魔が自室へ向かった後、コルベールは図書室へと足を運んでいた。理由は、ルイズが呼び出した使い魔のためだ。

直接多少の話を聞けたとはいえ、まだ謎の多い存在に対して、自分なりに情報を集めるくらいのはしておきたかったし、約束した以上は、帰す方法も探しておくべきだろうと考えたからだ。

なにより、二十年もの教員生活の中でも初めて見た珍しい契約の印も気になった。

調べたいことが一日で山積みになってしまったため、早速調査を始めようと思ったのだった。

何度も頻繁に出し入れされている本から、ホコリの堆積した誰にも見向きもされていないような本にいたるまで。

何冊もの本を取り出しては読み、はては手の届かない書棚まで魔法を使って飛び上がって、目当ての情報が載っている本はないかと探し続けた。

その甲斐あって、求めていた情報の一つを一冊の古書を見つけるこ

とが出来た。それは始祖ブリミルが使役したとされる使い魔について記された本だった。

その本のある一節に目を止め、読み進めていくうちに、コルベールは驚愕をあらわにした。

そうして学院長に報告することが増えてしまったな、と、コルベールは一人ごちた。

「神の右手」ヴィンダールブ、ありとあらゆる獣を操ることができたとされるブリミルの使い魔。

コルベールがルイズの使い魔からスケッチしたルーンと、そこに記されたルーンは同一のものであった。

・・・

夜が明けて、窓から陽の光が差し込んでくるころ。

ふかふかの柔らかいベッドの中で夢の世界へとトリップしていた私の頬をぺちぺちと、柔らかな感触のものが優しく叩いてきた。

「起きてくださあい。ご主人様ー、朝ですよー」

遠くの方から、私を呼ぶ声が聞こえた気がする。

さっきまでぐっすり眠っていたせいで寝ぼけ気味だった頭が、それのおかげで少し覚醒しかける。

「もうちょっと・・・あと五分だけ・・・」

とはいえ眠いものは眠いのだ。もうすこしこのままベッドの中でま

どろんでいたかった。

そうして開きかけた目を閉じようとする私だったが、いきなり力強い手に肩をがっしりつかまれ、一気にベッドの中から引っ張り出された

突然のことに驚いて目を覚ますと、そこには濃い緑色の髪にエメラルド色の瞳のメイド服の少女がいた。

「おはようございます、ご主人様」

「…………おはよう、テケリ」

肩にぶるぶるとした柔らかな感触。

寝ぼけ目をこすってよく見てみると、テケリの髪から手のような物が伸びて、それが私の肩を掴んでいるらしいのがわかった。それを見てはつきりと目が覚める。

どうやらテケリが自分の髪を手の形に変えて、私の肩をそれで掴んでベッドから引っ張り出したようだった。

ああ、姿を変える能力ってそういう事にも使えるんだ…………。昨日はどこから来たのか、どういう生活してたのかといったことばかり聞いていて、彼女の能力についてはあまり触れてなかったのだ、これはちよつと衝撃的だった。

「姿を変えてるんじゃないくて、細胞を再構築させてるんです。私たちの体は、万能細胞と呼ばれるもので構築されておりまして、一瞬で体を人の手足や内臓に形も機能もそっくりに変えることも、好きな形のまま金属みたいに固く、布みたいに柔らかくもなることもできるんです」

「髪の手」を元の髪に戻して、えっほんと胸を張ってそう答えるテケリ。ちよつと揺れる。どこがとは言わないが、私には無い物なの

でイラッとするのをできるだけ押さえた。

要するに全身を好きな形、好きな硬度に変えられるってことらしい。

「他にも何か出来たりするの？」

ベッドから降りて着替えを手伝ってもらいながら、テケリに他にも何か能力があるかもしれないと思ってとりあえず聞いてみた。

「私たちの体を複数に分けることも出来ますよ」

「それって分身みたいなものかしら？」

「そうですね。といっても分かれば分かれるほど小さくなっちゃいますし、能力や力を元と同じまま分かれるとなると最大でも十二人くらいが限度ですけど」

一人より二人という言葉があるけど、どうやらテケリはそれを一人で実践できるらしかった。

「あとは精神感応くらいでしょうか。ご主人様がいつどこにいても交信出来ますよ」

「そう……とりあえずそれ、授業中は控えてね」

私が混乱しそうだから。

話を聞き終える頃にはちょうど着替えも終わって、朝食をとるために早速部屋から出る。

すると、なんとという偶然か、私と同じタイミングで部屋から出たらしいキュルケと鉢合わせた。

「・・・・・・・・おはよう」

「おはよう。ルイズ。そのメイドはどうしたの？」

「初めまして、テケリと申します。えつと・・・・・・・・」

「キュルケよ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーよ」

「キュルケ様ですね、すっかり覚ええました！」

「それはいいんだけどね。ルイズ、あなたいままでメイドなんて雇ってなかったでしょうに、いったいどうしたのよ？」

私の代わりに受け答えていたテケリを、キュルケは怪訝な顔をして見つめていた。テケリの姿はどこからどう見てもメイドのそれだったし、私には学院に専属のメイドなんて居なかったから。キュルケがそう思うのも無理もないだろう。

私は、キュルケの問いに正直に答えることにした。

「そのメイドが私の使い魔よ。昨日呼んだ箱に入ってた物をお湯に浸してみたら、メイドになったの」

「・・・・・・・・ひょっとしてそれは冗談で言っているの？」

何言っただこいつと言いたげな目で見られた。

「ルイズ、昨日のアレが気に入らなかったってのはわかるわ。でもね、いくらなんでもメイドを雇って使い魔って言い張るのはどうか

と思うのよ」

同情するような視線を私に浴びせながらも、諭すように言うキュルケ。真実をありのままに言ったというのに、なんという仕打ちか。

「本当だつてば！ちゃんと使い魔のルーンだつてあるんだから。テケリ、この女にルーンを見せてやって」

私の言葉をうけて、テケリは右手に刻まれたルーンをキュルケに見せた。これで少しは信じるだろうか。

「これ、本当にルーンなの？魔法で刻んだとか魔道具でごまかしてるんじゃない？」

完全に疑いモードに突入したキュルケ。なんとなくこうなるとは思っていたけど、この分だと私が何を言っても聞く耳を持たなさそうだ。

「本当のことなのに……もうこうなったらアレを見せるしかないわね」

「アレって？」

勘違いされたまま過ごすのも嫌なので、この状況を手っ取り早く解決する手段をとることにする。

「テケリ、箱に入ってたときの姿に戻ってちょうだい」

「かしこまりました、ご主人様」

私の言葉に対してそう言っただけで、瞬間、テケリが全身を震わせた。そしてその顔が、腕が、足が、体が、人としての形を、姿を徐々に失っていった。

それと同時に、肌の色も白い肌色から緑がかった色へと変化していき――

そこまで見て私は目をそらした。それ以上見ていると何か大事なものが削られそうな気がしたのだ。主に精神的な意味で。

キュルケがひつ、と、悲鳴を上げるのが聞こえる。その声で、どうやらキュルケはテケリの姿が変わっていくのを、律儀にもしっかりと見続けていたらしいことがわかった。

ゆっくりと視線を戻す。そこには、箱に入って居たときと同じ玉虫色の球体状となったテケリの姿があった。

もつともあの時と違って凍ってはいないので、ぶにゅぶにゅの体をズルズルと、冒瀆的な音を立てながら這いずり動く姿まで見るようになったが。

「な、何、なんなのよこれ！」

キュルケにしては珍しく慌てたような声だ。まあ無理もないけど。

「私の使い魔だって言っただけでしょ……」

「わ、わかった。わかったからさっさと元の姿に戻して！」

「……………それが元の姿だけど？」

「さっきのメイドの姿によ！あなたわかって言ってるでしょ！？」

「まあ、ね。テケリ、もういいわよ」

私の言葉を受け、球状だったテケリがうねうねと形を変え始めるのを見て、私はまたも目をそらした。

.....

「あの、お顔の色がすぐれないようですが、大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫だから・・・」

メイドの姿に戻ったテケリが、心配そうな表情でキュルケに尋ねる。テケリの変身をすっかりと見てしまったキュルケは、憔悴しきった顔で後ずさりながらそう答えた。

どう控えめに見ても大丈夫には見えないし、ちょっとやりすぎたかもしれない。テケリが箱に入っていたアレと同じ物だと分らせるだけなら、体の一部を変化させて見せるだけでも十分だったかもしれないわけだし。

とはいえ、これでさすがにキュルケも信じただろう。

「その、なんていうか、あなたの使い魔って凄いわね。私のフレイムもなかなかの物だと思ってたんだけど・・・・・・・・」

「フレイムって？」

「そこに居るでしょ・・・・・・・・って、あら？フレイム、なにやってるのよそんな所で」

キュルケの部屋から鼻をちょこんと出している大きなトカゲが居るのが見えた。

それがキュルケに声をかけられて、その赤い巨体を揺らして、尻尾から炎を燃え上がらせながらのそのそと歩み寄って来た。

「見なさいよ、この尻尾！ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いない火竜山脈のサラマンダーよ。ブランドものよー。好事家にみせたら値段なんかつかないわよ？」

自分の使い魔を見て元気を取り戻したのか、顔色の戻ったキュルケが露骨に自慢するように言った。

「へー、そう。よかったわねー」

そんなキュルケに私はそっけなく返してやった。正直に言ってテケリに比べたら、サラマンダーでも立派な部類に入るだろうフレイムですら羨ましくなんて思えなかった。

能力でも希少さでも決して引けを取っていないどころか、むしろ圧勝している部分さえあると思っていたからだ。

「何よ、つれないわね。まあ、確かにあんたの使い魔も結構な物みたいんだけど、使い魔って言ったらやっぱりこういうのがいいわよね」

「あの、尻尾が燃えてますけど。大丈夫なんですか？」

「サラマンダーってそういう生き物なのよ。私には涼しいくらいだわ」

「そうなんですかー。少し触ってみてもよろしいでしょうか？」

「別にいいわよー」

興味しんしんといった様子のテケリがフレームに近寄った。

テケリが歩み寄ると、フレームが何故か怯えたように震えて、脅かすような鳴き声を出しはじめた。

そんな様子でテケリを警戒しているようにさえ見えたフレームをまるで気にせずに、テケリはフレームに近づいていつて頭を撫でた。途端にフレームはさっきまでとは打って変わって、借りてきた猫のように大人しくなる。

それどころか、ごろごろと甘えたような声を出して体を擦り付けはじめた。そんなフレームを見て、テケリは嬉しそうに体を撫でてやっていた。

「あら、サラマンダーが主人の私以外にも懐くなんて珍しいわね」

フレームとじゃれ合っているテケリを見てそう言つとキュルケは目を細めた。

それを見て、自分の使い魔を取られたような気分になってなんだかむっとする。

「そんなのと遊んでんじゃないわよ！早く食堂に行くわよ！」

私がそう言つと、テケリが少し残念そうな顔をしながらもフレームから手を離れた。

「あら、焼きもちかしら？」

「な、なな何いってんの！違うわ！テケリ、さっさとしないと朝食

抜きだからね！」

なんだか気恥ずかしくなった私は、そう言ってキュルケから顔をそらすと食堂へと駆け出した。

待つてくださあいと言うテケリの声と走る音が後ろから続いてきた。

・・・

「なんでわざわざ私の隣に座るのよ・・・」

アルヴィーズの食堂、席が殆ど埋め尽くされている状態のそこで、たまたま空いていた私の隣の席に座ったのはキュルケだった。

「空いてる席がこししか無かったからでしょ。嫌なら外で食べたら？」

「それは嫌。大体退くなら後から来たあんたがどきなさいよ」

「私だって嫌よ。そういえば、テケリはどこ行っただの？」

さっきまで一緒だったテケリが居ないのが、キュルケにはどうにも気になるしかった。

「貴族用の食堂でテケリと一緒に食事させるわけにはいかないですよ。厨房のほうで食事を出してもらうように言っただのよ」

なにか問題を起こしてなきやいいんだけど。あの後人前で私の許可無く姿を変えないように言っておいたし、多分大丈夫よね。

あの姿を変える能力さえ使わなければ見た目も中身もただのメイドにしか見えないんだし。

「まあ、それもそうよね。そういえば彼女って一体何者なの？ 最初見たときは平民のメイドかと思ったのに、いきなりあんなことするもんだからびっくりしたわよ。ひょっとして、亜人なの？」

そう言っただけキュルケはちょっと怒ったような顔をしながらも、好奇心を丸出しにして聞いてきた。

あんなこと、というのはキュルケの前で球状に戻ってみせたことだろう。あの時はずいぶんと青い顔をしていたキュルケだったが、今はもう回復しきったようだった。

「シヨゴスって言う種族らしいんだけどね。何でか分からないけど『召喚』で別の世界から呼んじやったらしいのよ」

「シヨゴス？ 別の世界？ 何よそれ」

目を輝かせて私に尋ねるキュルケに、私はこれまでのことを包み隠さず話した。テケリが異世界から来たことやその世界にいずれ帰ることになっていることも含めて、全部だ。

「別の世界ねえ。いきなり言われてもなんだか信じられないけど、でもアレを見ちゃうとそうも言っただけじゃないかしらね」

「信じられないなら、無理に信じなくたっていいわよ」

「そうじゃないってば。なんにせよ、一応は『召喚』も『契約』もうまく行ったみたいだし、良かったわね」

「う・・・・・・・・いきなり何よ」

「いずれ帰すことになるにせよ、いい使い魔を引き当てたんだから。この調子で授業も頑張んなさいよ？」

そう言つてキュルケは微笑むようなやわらかい笑顔を浮かべた。

彼女にしては珍しく、ただ私を認めるような言葉だったので少し驚きながらも、キュルケの思いがけない発言に、分かつてるわよとだけ小さく返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0511u/>

ゼロの使い魔は不定形

2011年6月27日01時04分発行